

2026年6月3日(水)

老球の細道925

## 二つの「信は力なり」

会津バスケットボール協会 室井 富仁

私が教員になろうと思った最初の動機は1965年から1966年にテレビで放映された石原慎太郎原作・青春ドラマ『青春とはなんだ』を見た小学6年生のときである。ドラマの内容は夏木陽介演じるアメリカ帰りの野々村健介が、田舎町・森山町の森山高校の英語教師に就任し、ラグビーを通じて生徒たちと心の交流、人間教育を展開していく。また同時に町に蔓延する黒い影と戦っていくという内容だった。バスケットではなかったが、スポーツを通じての教師の姿に小学6年生ながら感激したことを今でも覚えている。

このドラマの主人公を彷彿させたのが先日亡くなった元京都伏見工業(現・京都工学院高校)ラグビー部監督の山口良治さんだった。1980年代京都ではワルの集まる学校で有名であった伏見工業で、素人同然の生徒たちを妥協しない練習で鍛え上げ、全国大会優勝を4度成し遂げた。その足跡はテレビドラマ『スクールウォーズ』のモデルとなった。高校バスケットでは能代工業や桜花学園が全国制覇50回以上も成し遂げているのにテレビドラマにならなかったのは残念である(漫画『スラムダンク』のモデルになったが・・・)。

山口氏は「信は力なり」を指導モットーにして、選手達の可能性を信じ続けてきたという。最初は山口氏を信じられなかったワル達も、先生の心からの愛情に次第に心を開き、最後は先生への絶対的な信頼に変わっていった。指導者と選手の相互信頼はそう簡単にできあがるものではないが、出きた時こそミラクルの大偉業が成し遂げられるのだろう。かつて、山口氏の教え子である大八木敦氏の講演をワシントンホテルで聞いたことがあるが、山口氏への信頼がいかにすごかったかを思い知らされた。いかに高邁な理論を持って指導しても、選手に信頼されない指導者は、いくら情熱を持って指導しても選手には響かない。

ところで、「信は力なり」を日本のラグビー界に伝わったのは、あのヒットラーの『わが闘争』からだという。(大西鉄之祐『闘争の倫理』二玄社)。山口氏よりももっと前に打ち出したのが日本のバスケットボールの神様・故吉井四郎氏だった。吉井氏のコーチング哲学3か条の一つに「信は力なり」がある。これは山口氏の内容と少し違っている。

吉井氏の3か条とは下記の通りである。

- ① **バスケットの神を信じる**：神は自分の努力を見ている。努力をしても勝てないかもしれない。しかし、神は努力を評価する。だから日々の努力を怠ってはいけない。
- ② **教育万能者でありたい**：選手は無限の可能性を持つ。指導者は自分の力で、その可能性を開くことができる。
- ③ **信は力なり**：上記二つのことを信じること。そのうえで、指導者が心底信じたものでなければ選手に伝わらない。自分がわからないこと、説明できないことは教えない。

県高校大会が終了し、これから中学校、ミニの公式戦が始まる。勝利したチーム、負けたチームの指導者も、この二人の「信は力なり」を初心に返って考えてほしい。